カマド内出土遺物の意味について

小　林　清　隆

I　はじめに

古墳時代後期以降の竪穴住居の調査で，カマド内から遺物を検出することがある。筆者が現在担当している，千葉急行線建設事業地内の千葉市種ケ谷津遺跡，同じく榎作遺跡などでも，すくなからずカマド内から遺物が出土している例が認められる。その遺物のなかには，様々な要因によって，カマド内に混入してしまった土器の小破片もあるが，完形で原位置に近い状態で出土していると考えられるものも存在する。今回ここで対象とする「カマド内出土遺物」は後者の方で，県内の鬼高期の調査資料を中心に，この遺物のもつ意味と，カマドの廃棄について検討を加えたい。

II　出土している遺物の種類

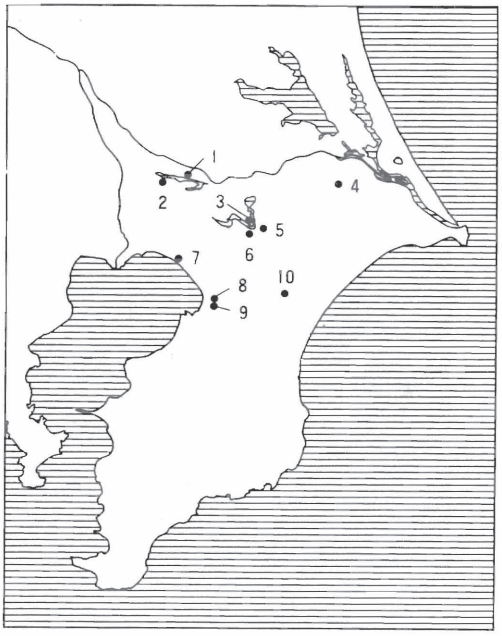
竪穴住居内の煮炊き用の施設であるカマド周辺に，遺物がまとまっていることは，しばしばあるが，「カマド内出土遺物」を，燃焼部，つまり右・左の袖部に囲まれた場所から出土したもの，と限定して取り上げることにしたい。こうした基準を満たすには，カマド自体の遺存が良好なことが必須となるので，竪穴住居の掘り込みが，大型の甕の器高程度残っていなければならないし，また，遺物を問題とするため，報告書においては，出土状況を検証できる図面が呈示され，出土遺物の実測図とその観察結果が，それぞれ照合確認できることが必要である。

さて，竪穴住居からは土器類をはじめ，土製品，石製品，鉄製品，玉類，様々な自然遺物などが出土するが，カマドの中から出土する遺物はどうであろうか。まず最初に，先ほどの条件に適う調査報告書を基に，出土遺物の種類からみていきたい。

第１図に示した県内10遺跡のうち，１の我孫子市日秀西遺跡（註１）については，カマドの詳細な図面が示されているものの，遺物の遺存状態等で一部不明な点があるため，数量的な資料は次の９遺跡の報告書を使用した。

2．沼南町大井東山遺跡（註２）
3．印旛村駒込遺跡（註３）
4．佐原市小六谷台遺跡（註４）
5．酒々井町伊篠白幡遺跡（註５）
6．佐倉市タルカ作遺跡（註６）
7．千葉市上ノ台遺跡Ａ・Ｂ地区（註７）
8．千葉市種ケ谷津遺跡（註８）
9．千葉市有吉遺跡第１次地区（註９）
10．東金市久我台遺跡（註10）

以上９遺跡で，鬼高期に比定されている竪穴住居の合計は，332軒に達する。この数は，カマドが破壊されていたり，調査されなかったものも含んでいるが，全体の約３割に当たる98軒の住居のカマド内に遺物が検出されていることが確認できた。98基のカマド内から出土した遺物の総計は149点を数え，その内訳をみると，甕の出土が49点と最も多く，以下土製支脚39点，杯・椀31点，高杯19点，



第１図　主な集落遺跡

（１．日秀西　２．大井東山　３．駒込　４．小六谷台　５．伊篠白幡　６．タルカ作　７．上ノ台　８．種ヶ谷津　９．有吉　10．久我台）

甑4点，壺3点，手づくね土器2点，鉢1点，土玉1点となっている。土器類はすべて土師器である。遺物を出土したカマドの数と，遺物総数を比較すれば明らかなように，遺物は1基につき1点にとどまらず，複数で出土している例もある。単独出土は64例存在し，2点発見されているのが21基と次ぎ，3点が9基，4点の出土が認められたカマドが4基あった。

単独出土の遺物別出土率では，土製支脚が24点と高く，甕16点，高杯12点，杯・椀10点，手づくね土器1点，土玉1点という結果である。2点以上で出土している場合の遺物の組み合わせは，かなりのバラエティーがあり，甕と支脚との伴出が6例あった以外，特に傾向はとらえられなかった。一応全ての伴出関係を下記に挙げておく。

◎2点出土（21基）

甕・支脚（6基）　大井東山049・064，駒込29，伊篠白幡12・38・46B

甕・高杯（3基）　上ノ台12，種ケ谷津8，久我台158

甕・甕（3基）　大井東山018，タルカ作22，種ケ谷津1

甕・鉢（1基）　大井東山054

甕・壺（1基）　大井東山010

甕・杯（1基）　タルカ作016

壺・杯（1基）　伊篠白幡6

杯・高杯（1基）　種ケ谷津9

杯・杯（1基）　有吉72B

高杯・支脚（1基）　種ケ谷津7

手づくね土器・支脚（1基）　種ケ谷津3

支脚・支脚（1基）　久我台114

◎3点出土（9基）

甕・甕・支脚（2基）　タルカ作36，久我台76

甑・杯・支脚（2基）　大井東山056，小六谷台012

杯・杯・支脚（2基）　タルカ作28・33

甕・甕・甑（1基）　有吉76

甕・甑・杯（1基）　伊篠白幡48

甕・高杯・高杯（1基）　上ノ台8

◎4点出土（4基）

甕・甕・甕・甕（1基）　小六谷台004

杯・杯・杯・杯（1基）　小六谷台007

壺・杯・杯・杯（1基）　小六谷台008

甕・甕・甕・支脚（1基）　タルカ作15

III　遺物の出土状態

県内の古墳時代後期（鬼高期）のカマドの大部分は，砂質の粘土で構築されている(註11)。教科書的なカマドの使用方法では，天井部に空いている釜孔（掛け口）の下の火床に土製支脚を立て，その上に甕をすえ，さらに甕の上に甑を組み合わせていたことが想定されていて，実際にそう使っていたはずである。カマド内から出土する遺物も，土製支脚と，煮沸用具である甕が149点中88点を占め，一見単に使用場所，あるいは使用時の状態で廃棄されたかの様にみえる。しかし，支脚や甕のほかに，カマドにかけたとは到底考えられない，

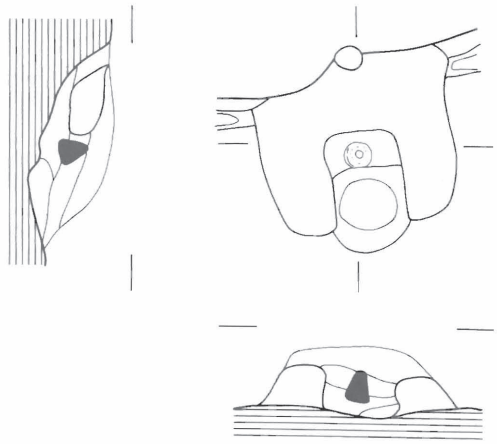
遺跡名	基数／総軒数	出土遺物の種類									出土数別基数				遺物数
		甕	甑	鉢	壺	杯・椀	高杯	手づくね	土玉	支脚	1点	2点	3点	4点	
大井東山	11／33	9点	1点	1点	1点	1点	1点	0点	0点	4点	5基	5基	1基	0基	18点
駒込	12／59	2	0	0	0	2	3	0	0	6	11	1	0	0	13
小六谷台	5／6	2	1	0	1	10	1	0	0	1	1	0	1	3	16
伊篠白幡	14／34	9	1	0	1	5	0	0	0	4	9	4	1	0	20
タルカ作	15／43	9	0	0	0	7	0	1	1	8	9	2	3	1	26
上ノ台	6／6	3	0	0	0	0	6	0	0	0	4	1	1	0	9
種ヶ谷津	6／8	4	0	0	0	1	3	1	0	2	1	5	0	0	11
有吉	12／40	4	1	0	0	3	3	0	0	4	10	1	1	0	15
久我台	17／103	7	0	0	0	2	2	0	0	10	14	2	1	0	21
計	98／332	49	4	1	3	31	19	2	1	39	64	21	9	4	149

表1　出土遺物の種類と出土数

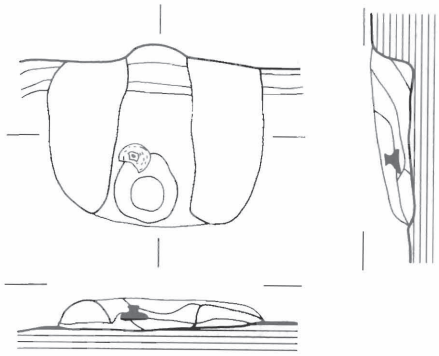
杯・椀・壺なども出土しており，一概に使用状態といえない場合も多い。こうしたことをふまえて，個々の出土状況に当たっておきたい。

カマドの機能面で一体と考えられる土製支脚は単独出土の頻度が高く，カマドの使用停止に伴って，そのままにされているかのように，正立状態での検出例が多い。出土位置は，火床部の若干凹部となったところからやや煙道側に寄って，正に釜孔の直下といった場所である。ところがその出土レベルを観察すると，第2図①のようにカマドの底面から浮いているのが目立つ。支脚と煮沸用具である甕が伴出している大井東山竪穴住居071は，火床部にすえた形で甕が出土し，支脚はその後方からみつかっている。久我台SI76住居では，火床面から浮いた位置に支脚が正立し，その上に甕がのっている教科書的な状態があるが，甕はもう1点出土しており，それは支脚なしの全く浮いた状態である。カマド内に残される支脚よりも，カマドの脇などに取り出されているものが多いこと，正立している支脚が火床面より浮いて発見されるなどから，一度取り出された支脚が，最後にもう一度納め直されている可能性があることを，考えておかなければならないだろう。

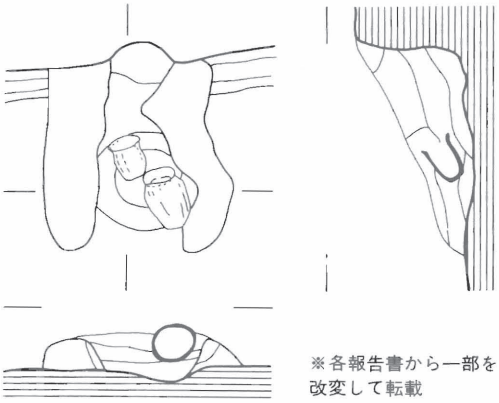
第2図②は，高杯の出土状況の典型といえる。杯部を下にした倒立で置かれ，出土位置・レベルとも支脚とほぼ同様な傾向をうかがうことができ，支脚の代用として用いられていたと考えることが大勢である。確かに久我台SI15住居の高杯脚部のように二次的な火熱を認めるものや，焼土が付着するものなど，カマドの中で使用した痕跡を残す個体もある。しかし，出土高杯のほとんどは，村山好文氏が指摘するように「土器に火は受けておらず，カマドを使用していない状態の時に置かれていたと考えられる」(註12) 状況を呈している。土製支脚の代用として高杯を用いるならば，別に欠損品でも使用に耐えられると思われるが，単独出土12点のうち，脚柱部だけのもの5点に対し，7点が完形品か完形に近い遺存を保っていて，使える道具をなぜ転用したのかという疑問が起こる。上ノ台第8号址では杯部を欠いた高杯が正立して，支脚と同じように釜孔直下に位置するほか，完形品が倒れた状態で出土している。器高の異なる2点を同時に使っていたとは考えられない。久我台SI158住居の，伏せた小形甕のうえにのっている高杯脚部というのも不自然な出土状態である。



①駒込　第60号住居址



②上ノ台　第11号址



※各報告書から一部を改変して転載

③タルカ作　第36号住居跡

第2図　遺物出土状況（1）

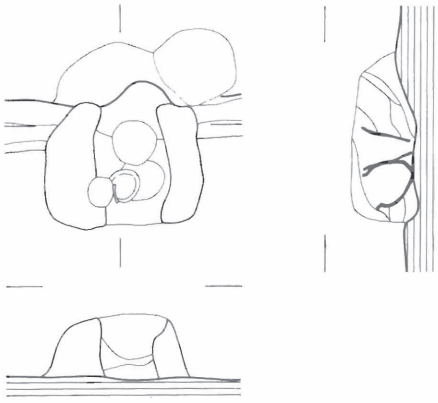
甕の出土状況を大別すると，火床面に接して出土しているか，火床面から浮いているかの二つになるだろう。先にふれた大井東山竪穴住居064などが，火床面に甕の底部を接しているのがよくわか

るものの類例は少なく，ほとんどが火床面から浮いた位置に検出される。第２図③は口縁部を煙道側に向けた甕２点が，火床面からやや浮いて斜めの状態のまま出土しているところである。土製支脚はこの２点の甕の手前の，焚口側に出土している。タルカ作第36号住居跡と極めて似ている状況は，種ケ谷津２号住居にもある。仮に２個の甕を同時にカマドにかけることが日頃あったとしても，支脚なしでの使用では，熱効率が大変悪くなってしまうことが想像される。したがって支脚が取り出されているのは使用時としてはおかしいし，浮いて出土しているのも，火床面の上にすでに堆積土があったことを物語っている。

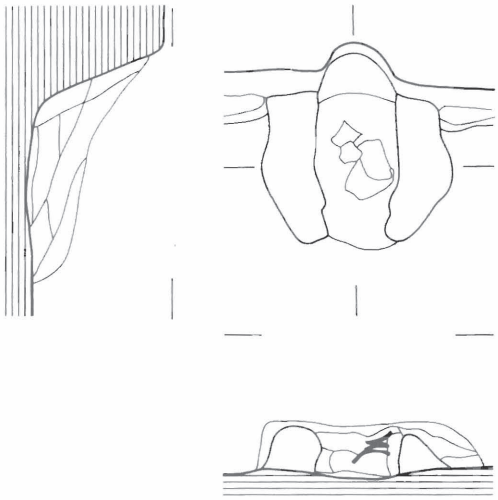
第３図①は，火床部に底部を接し正立していた完形の甕１点と，甕の上半部１点，それに完形の甑の出土状態である。甑は甕の上にすえてセットになり得るのであって，カマド内に並んでいるのは，明らかに使用時とは異なる状態である。カマドの中にかたずけておいたとの見方もあろうが，上半分しかない甕といっしょに収納する必要はないと思われる。大井東山竪穴住居056では，正立した支脚の後方で，底面から浮いたところに横になった甑が出土している。これも使用時とは別の置かれ方である。

完形ないし完形に近い状態で出土している遺物の保存状態が，不思議なくらい良好で驚かされる場面がある一方，打ち割ったと思われる土器片が出土することもある。第３図②は土器片の出土状況である。この土器片は，底部を欠く甕の２分の１と，３分の１の甑，完形の杯であるが，断面図から，土圧で破片になったというよりも，最初から破片であったものを重ねて置いたことを知ることができる。出土レベルは，底面からやや浮いており，火床部の堆積土の上面にのっている形である。駒込第29号址の例では，正立している土製支脚の上に土器片が重ねられている。はたして何も手を加えない状態で，土器片が支脚の上に安定しているものなのだろうか。支脚の上部までが埋められていて，その上に土器片を置いたというのなら納得がいくのであるが。

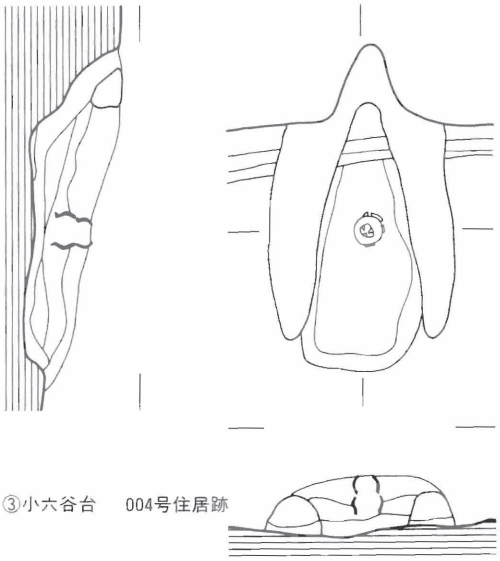
完形に近い遺存でありながら，底部だけが欠損する遺物の出土も認められる。第３図③は，底部を打ち欠いた２個体の小形甕が，倒位に重ねられた状況で検出されているのを示すものである。日



①有吉Ⅰ次　076住居址



②伊篠白幡　第48号住居跡



③小六谷台　004号住居跡

第３図　遺物出土状況（２）

秀西029F住居跡では，正立している支脚の上に，底部のない甕が正位でかけられている。

以上確認してきたほかに，火床面から浮いたところに伏せた状態の杯が検出されたり（駒込第16号住居址），杯3点と壺が伴出（小六谷台008号住居跡）するなど，カマド内の遺物出土状況は，使用時とは異なる特殊なあり方といえる。

Ⅳ　カマドの廃棄と遺物

これまでの検証によって，カマド内に残された遺物が，使用の最終状態ではないことが明らかになってきた。しかしカマド自体の姿としては，遺物が入ってから後，使われることがなかったので，多少の改変を受けていたにしても，最終的な姿に近いということになろう。ところが，ここで今一度遺物の出土状況に振り返ってみると，大型の甕が無傷で出土しているにもかかわらず，完全な形をとどめていたカマドが皆無という矛盾があることに気がついてくる。

遺物の有無とは関係なく，完全なカマドというのは見当たらない。特に，焚口側の天井部が残っているのを，筆者は調査した経験がないし，まだ見たことがない。毎日の使用によって，かなり硬化していたはずの天井構築材が，土圧に弱い甕でさえ割れもしなかった環境下で，その存在すらがわからなくなってしまうほどになるのだろうか。存在の確認がなかなか困難であるのは，中沢悟氏がいうように，カマドが「こわれるだけでなく，こわされている」（註13）からなのではあるまいか。すでに破壊されていたものであれば，どう精査しても検出できないのは当然である。では，いつ壊されたのであろうか。

カマド内に正立している完形の甕や，本来天井部があった位置に遺物が出土していることなどを考えると，それらの遺物が燃焼部内に入る以前に壊されたと想定できる。遺物を燃焼部に置いてからという逆の状況では，カマドの破壊に伴って，遺物までが壊れる可能性が大きいはずである。さらに出土遺物が火床面から浮いているのは，遺物の下にすでに火床面を覆う土が存在していたことを示唆し，そのままでは不安定と思われるものが正置を保っているのは，倒れないよう手を加えた結果と考えたい。

以上を整理すると，①カマドの使用停止，②カマドの部分的な破壊，③火床面を土などで覆う，④土器等をすえる，⑤燃焼部内に土をつめ込む，というような工程が復元できる（註14）。すなわち遺物は，カマドの廃棄に伴い意図的にカマド内にすえられたものと見ることができるのである。

はじめに結果をだしたとおり，カマド内出土遺物の種類は様々である。それはカマドの機能が停止した後にすえられるものであることから，遺物自体の特質や遺存度よりも，掛け口を塞いで，二度と使用することがないという意思表示として，それらがより意味をもっていたからだと解釈したい。出土遺物は掛け口閉塞の表徴だったのである。

カマドを廃棄するに際して，天井部を壊したり，念を入れて掛け口を塞ぐなど，かなり特別な意志が介在していたのは確かである。その意識が今日まで残る「カマド神信仰」の源流になるのかは，知る術もない。しかし，佐々木隆彦氏の紹介している，九州地方の5世紀末頃の松の木遺跡では，「竈内において自然石を利用した支脚上に良質の杯形土器を置き，その廻りに土製模造鏡2，土製丸玉1，土製勾玉1，手捏ね土器3を整然とならべた」例があり（註15），カマド廃棄時の祭事行為が確認されている。各種の模造品や手づくね土器が出土すれば，それを祭祀行為の所産とみなすことになろうが，掛け口閉塞の表徴であるカマド内出土遺物そのものは，祭具とは呼べないであろう。カマド廃棄に伴う破壊から遺物のすえつけまでの行為が「祭祀的な様相」になり，個々の出土遺物からは決して祭祀の実態は究明されてこない。これが，カマド内出土遺物のもつ特質である。

Ⅴ　おわりに

カマド祭祀は，すでに何人かの研究者によって取り上げられている問題である（註16）。小稿は，カマド内から出土する遺物の意味を，カマド廃棄に伴う一連の行為の中で，カマドの掛け口を塞ぐ表徴で置かれたものであるという解釈に立って説明してきたつもりである（註17）。これがただちに寺沢知子氏が述べる「住居廃棄と一体化した祭祀」（註18）にむすびつくかどうかは，なお慎重を期す必要があるだろう。なぜなら今の段階では，信仰の対象が何であったのか（祭祀となり得るかどうか）明確にすることができないし，遺物をすえる場合と，何もない場合の二者があることの違いに

ついて決定的な説明ができないからである。

今回は，種ケ谷津遺跡の整理作業を進めるなかでつくったメモを整理したにすぎず，資料的には，県内，それも北総という小範囲しかあつかうことができなかった。今後，地域や時間幅を拡大して再び検討してみたい。

註

1）上野純司ほか　『我孫子市日秀西遺跡発掘調査報告書』（財）千葉県文化財センター　1980

2）今泉　潔ほか　『大井東山遺跡・大井大畑遺跡』　（財）千葉県文化財センター　1987

3）村山好文ほか　「駒込遺跡の調査」『平賀』平賀遺跡群発掘調査会　1986

4）栗田則久ほか　「小六谷台遺跡」『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』（財）千葉県文化財センター　1988

5）三浦和信ほか　『酒々井町伊篠白幡遺跡』（財）千葉県文化財センター　1986

6）石倉亮治ほか　『佐倉市タルカ作遺跡』（財）千葉県文化財センター　1985

7）種臼斉吾　『千葉市上ノ台遺跡』　房総考古資料刊行会　1973

上ノ台遺跡D地区については，日秀西遺跡と同様な理由から対象から外した。

8）関根重夫ほか　『千葉市種ケ谷津遺跡』（財）千葉県文化財センター　1985

9）種田斉吾・阪田正一　「有吉遺跡（第1次）」『千葉東南部ニュータウン3』（財）千葉県都市公社　1975

10）萩原恭一ほか　『東金市久我台遺跡』（財）千葉県文化財センター　1988

11）我孫子市西台北遺跡などに，軟砂岩を用いてカマドを構築している例があるが，県内では石材をカマド構築材とすることは，時期的・地域的にみても主流とならなかった。ちなみに西台北5号住居跡のカマドは，天井部が壊れていて，遺物は出土していない。

石田守一ほか　「西台北遺跡」『我孫子市埋蔵文化財報告　第10集』　我孫子市教育委員会　1987

12）村山好文　「平賀遺跡群における古墳時代後期土器の再検討」『日本考古学研究所集報X』日本考古学研究所　1988

13）中沢　悟　「竈の廃棄について」『大原Ⅱ遺跡・村主遺跡』　（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1986

14）①～⑤の工程のうち，遺物が出土しなかったカマドについても，①～③，あるいは①～③・⑤の行為は行われたと考えられる。

15）佐々木隆彦　「竈祭祀について」『春日市文化財調査報告書6　赤井手遺跡』　1980

16）金子裕之氏は，住居から出土する祭祀遺物の増加する時期が，カマドの普及する時期と一致し，カマドの周りに祭祀遺物が分布することから，「竈そのものを対象とした祭り」が成立していたと説明し，それが「竈の普及がもとになって東日本独自に発生したもの」と考えている。

桐原健氏は，鬼高期の初期には実用品であった支脚に，「竈神・宅神等の性格が付与されだしたのが鬼高期末，それが普遍化したのが七世紀以降，奈良・平安時代」とし，支脚・支石を「竈神の憑代」とみなしている。（千葉県内の鬼高期の支脚の扱われ方をみるかぎり，カマド外に無造作に取り出されていたり，破損するものが多く，使用者は，単なる道具としての意識しかなかったと思われる。）

金子裕之　「古墳時代屋内祭祀の一考察－関東・中部地方を中心として－」『国史学』84　1971

桐原　健　「古代東国における竈信仰の一面－竈内支石のあり方について－」『国学院雑誌』78－9　1977

17）飯塚武司氏は，平安時代のカマド内遺物出土状態から，カマドを破壊してから土器を置くという行為を，「カマドの機能を停止した際に行われたカマド神に対する祭祀に伴うもの」との見解を示している。

また，栗田則久氏も平安時代のカマド内から出土した墨書土器の使用例の一端として，カマド祭祀にふれている。

飯塚武司　「カマド内遺物出土状態の検証」『№512遺跡　多摩ニュータウン遺跡　昭和59年度　第4分冊』　（財）東京都埋蔵文化財センター　1986

栗田則久　「考察　出土状況よりみた墨書土器の機能」　前掲註4）に所収

18）寺沢知子　「祭祀の変化と民衆」『季刊考古学』第16号　雄出閣出版　1986